

清末写情小説における「女性」：近代初期文人の女性をめぐる肖像とその在り方

著者	李 艶麗
学位授与年月日	2014-02-28
URL	http://doi.org/10.15083/00006520

論文の内容の要旨

論文題目 清末写情小説における「女性」
——近代初期文人の女性をめぐる肖像とその在り方
氏 名 李 艶麗

1. 本稿の目的

清末は中国小説史上、最も繁栄した時代であった。写情小説はそうした清末小説を代表するものだが、本稿ではこの「写情小説」における女性像及び「女性的なもの」という文学現象に着目し、その背後にある、中国文化の特徴ともいえる「言志」「載道」について論考する。この文化現象の把握は、先行研究において特に不十分であった。

具体的には清末写情小説を切り口として、清末の激動期に生きた文人の姿を追い、彼らが「近代」と遭遇した際の思想や心境を検討する。本稿での「近代」の定義とは、時代的な概念というよりも、自我の誕生や転換期における社会構造の変動など、作品内に見られる具体的な表象に基づいている。この時代は、動揺と不安に満ちた分裂期であった故、多数の英雄的文人が登場し、異彩を放った。彼ら林紘や吳趸人、蘇曼殊などは学界の注目を浴びてきたが、写情小説家としての側面は見落とされてきたように思う。また、冷血などは未だに無名である。

「女性」からの文人像の検討は、あくまでも清末小説の一側面を映し出すに過ぎない。ただし、本論文で明らかにされた写情小説家における「言志縁情」の様相は、清末文人研究の空隙を補うものであり、そこでの「情」の働きは清末文学史のみならず清末・中国思想史を解明する上で極めて重要である。

2. 本論文の梗概

本稿では以下二点を基本的視座として挙げる。

第一に、清末写情小説に対する「無情の情場」という評価は、政治功利小説の基準を尺度にしたものである。つまり、その作者である近代文人は伝統的士大夫の使命感を確かに帯びてはいたが、彼らは写情小説において何よりも「情感」の表象こそ重視したのである。そして、この「情」を通して忠孝節義という「理想」を語るのが写情小説の姿であった。

第二に、「無情の情場」は、伝統的政治体制下における「文人」男性の軟弱さを反映したものであった。すなわち、皇帝を「陽」とする儒教制度下において、文人は常に「陰」の位置にあった。この構図のもとでの「女性」叙述が中国文学で普遍的に見られるが、清末写情小説の「女性」描写・創作にはそれ以前には見られない特徴が付与されていた。この点が本論の主題である。

その特徴は、端的には中国と西洋近代との遭遇とそれに伴う伝統的価値観の凋落によって現れた。この歴史的転換期に、清末写情小説の作家たちは、(女性という「陰」に対する)男性としての自らの「陽」を維持しつつも、この凋落を埋めるべく、従来「陰」であった女性の「情感」を国家の「理想」にまで押し上げようとしたのだ。

更に、このことは従来陰柔化・女性化していた「文人」が、中国思想史上初めて自らを「陰」の位置から脱皮させることを視野に収めた瞬間でもあったといっても良い。つまり、儒教体制の下では「陰」「女性」の役割を果たした文人がいよいよこの歴史的枠組みを破ろうとする予感を、清末写情小説は暗示しているのだ。ただし、実際には清末写情小説家たち自身はあくまで「陰」であること、つまり伝統的な忠孝節義を重んじていた。

本稿では、こうした清末男性文人の限界についても議論する。その限界の最大の要因は、「異性化」はあくまで「化」であり、作家の男性としての権威的身体は保持されたままだったことに求められる。他方で女性は「情感」に篤く描かれたが、彼女たちの真情は常に男性の権威性によって阻まれた。しかし、儒教体制の瓦解が進む中で、女性の「情感」が、忠孝節義に象徴される「理想」と対等の関係、さらにはそれ自体として存立する要件が整ってくる。

清末写情小説における「女性」描写・創作の特徴とは、まさに以上のような近代中国黎明期における「理想」と「情感」をめぐる価値転換にあるのである。

3. 各章の梗概

本稿は三部、十章で構成される。第一部では清末写情小説の女性像を整理し、それと清末社会の関連を分析する。第二部では写情小説の「女性」と文人たちの位置の関連、つまり写情小説の男性像の「女性化」現象に内包される文学的社会的意味を解明する。第三部では、「女性的なもの」は、「伝統」と「近代」という背景のもとでどのように製造されたのか、また、どのような変化が起こったのかを検討する。

<序論>

清末写情小説の現れた時代背景や、その定義者について概略を述べる。先行研究の整理に基づき、「写情小説」を定義し、考察の対象、つまり小説家および作品の範囲を定める。また、古代文学における「女性」叙述の系譜を整理した上で、これまで見落とされてきた「女性的な

もの」——女性化した男性像を問題提起をする。

<第1部> 写情小説の女性像と清末社会（第一章～第三章）

1900年前後の清末写情小説の代表作を考察すると、「忠孝節義」「深い愛情」「勇敢奔放」といった言葉によって象徴される女性像をまとめる。

これらの「徳」の女は、みな庶民の娘である点において、それ以前の伝奇小説や清末の狭邪小説に登場する女性と大きく異なる。この現象は、小説創作上において社会的に興味ぶかい。歴史を溯りながら、それを位置づけてみたい。端的にいうと、「国民の母」として清末の時代潮流を象徴する。すなわち、写情小説の中に、明清の恋愛小説と区別する社会背景（時勢）が設定されているのである。激動の「社会」によって、忠誠、善良、勇敢、度量の大きさが引き立てられ、そこから政治の改良や新民養成、中華再建の志を実現しようとしたのである。

<第2部> 写情小説の「女性」と文人たちの位置（第四章～第六章）

筆を尽くして、服飾から動作、心理まで、文人は「女性」を生き生きと描いている。こうした文学現象が作られた文人の心理（母性への未練）を哲学・深層心理学的に解釈し、また、創作の文芸手法、主体に対する限定性、文人の個人生活の体験に注目する。

一方、写情小説の男性像は多愁、善感、文弱、卑怯、利己、逃避、受身という形容をあてることのできる人間として作られている。そもそも人間性に関連している人柄だが、中国では「女性化」「陰柔化」という特徴とも結びつく。

写情小説家は文人像の描写においては、古代小説の書き方を用い、男性の弱点について何ら批判する意図を持たない。これらは、写情小説家が伝統文人の一員として超えることのできない限界を表している。また、清末新政の科挙の急変による、彼らの周縁化の地位を示している。写情小説の作者である吳趸人、何諷、李涵秋、蘇曼殊、符霖、徐枕亜は、科挙の功名を汲々として求めることはしない。彼らは自覚的、あるいは無自覚的に商業社会に参加するようになった。政治危機、民族危機、社会動乱による価値観の混乱、道徳の退廃、外国文化の衝撃、啓蒙思潮の勃興、文化商業の発展は、彼らの小説創作に深刻な影響を及ぼした。

写情小説に現れる「女性的なもの」は、女性描写を通じて男性（文人）の理想や志を表すものだが、これは男性（文人）が中国社会や政治機構において「女性的」（陰）位置にあり、女性化という倫理処理がなされていたことが分かる。

<第3部> 「女性的なもの」と近代への働き（第七章～第十章、補論）

写情小説に見られる「女性的」な現象は、文学的中国社会の産物である。「文弱」な男性像は、「文」の神聖性や、科挙制が生み出した「世俗化」、そして「重文軽武」に基づく中国人の審美に関わっている。その具体例として、清末文人が筆名に女性名を好んで使用したことや、女性読者が美男の男性像を歓迎したことが挙げられる。

写情小説の創作背景に清末文人の士大夫としての使命感があったことは否定できない。しかし、それよりも更に重要な背景があった。つまり、恋愛小説である写情小説は、文人の身分再建上の重要な道具であったのだ。すなわち、彼ら写情小説家は、近代都市上海に勃興したメデ

ィアや文学サークル、消費文化を通して、古来の青楼文化を継承しつつも、職業文人という新たな生活様式を確立したのだ。そうした彼らの活動を支える重要な理論的根拠として「重情論」がある。

そして、経済に押し出されるように、写情小説家は中国伝統文学の主流である——「潜在」的主流——恋愛小説を推進し、通俗小説の潮流を主導した。彼らは近代出版業の実益を得て、経済的活路を見出し、同時に彼らの生産も、近代出版市場や読者の養成に重大な役割を果たした。ここで、代表作家として、吳趸人と林紘を論じ、写情小説家の肖像を肉付きにする。また、清末民初の文壇で活躍した冷血（陳景韓）も、異色の反写情作家として考察する。

清末写情小説のブームは、1911年に起こった辛亥革命を経て、民国の鴛鴦蝴蝶派に延長された。さらに、「五四」新文学における内面の発見や「人間の文学」の主張は、清末写情小説の「女性」描写・創作に見られる思想史的意義なくしては成立し得ないことを証明する。

本論の最後に、写情小説（清末小説）を伝達する媒介として、小説雑誌、翻訳文学を調べ、清末小説家と日本の関連を考察する東アジアでの比較研究を展望する。

<結論>

本論の論点を整理し、清末写情小説を研究する意義を、清末文学史のみならず清末・中国思想史を解明する上で極めて重要な働きをしたことをまとめる。そして、近代以後の女性の創作と男性作者の創作との比較を今後の課題として追及したい。